

## 平成24年度《先端歯学スクール2012》参加報告

楠山 讓二

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科  
健康科学専攻 発生発達教育学講座  
口腔生化学分野 博士課程3年

私は今年度、先端歯学国際教育研究ネットワーク主催の『先端歯学スクール2012』に鹿児島大学大学院生の代表として参加させていただき、最優秀賞を受賞することができました。今回、光栄にも紀要に執筆する機会をいただくことができたため、『先端歯学スクール』への参加報告と、貴重な経験から得たものについて述べたいと思います。

まず『先端歯学スクール』について簡単にご紹介させていただきます。『先端歯学スクール』は全国の国立大学法人歯学部連携ネットワークによる【口腔からQOL向上を目指す連携研究】の一環で、各大学で選抜された大学院生への教育と研究指導を目的として、平成17年度（前身を含む）より行われている事業です。具体的には、大学院生による口演発表が行われ、その研究とプレゼンテーション内容の順位を競うというものです。成績優秀者にはTravel Awardが授与され、国際学会での発表という更なる活躍の機会が与えられます。

鹿児島大学からも第1回より大学院生が発表を行っ



写真1 先端歯学スクール参加者  
(前列左から二番目が筆者)

ています。平成20年度からは鹿児島大学歯系大学院生発表会が開催されるようになったため、発表会の上位入賞者が次年度の『先端歯学スクール』へ派遣されています。私は平成23年12月10日に行われた鹿児島大学歯系大学院生発表会の継続研究発表の部にて、第1位を受賞させていただき、平成24年度の『先端歯学スクール』派遣者として選出されました。

今年度の『先端歯学スクール2012』は、平成24年9月20～21日にかけて、神奈川県三浦半島のマホロバマインズ三浦にて開催されました。当日はまだまだ鋭い日差しが残っていましたが、国立・私立歯系大学院から選ばれた大学院生達によって、残暑を凌駕するような熱い研究発表が行われました。(写真1)

『先端歯学スクール』において最も特徴的だったのは、全国の歯系大学で活躍する教授陣が一堂に会することです。今回も実に20名の基礎歯学・臨床歯学の教授が参加されました。全ての先生方が各分野で高い実績を挙げ、大きなプロジェクトを担っており、歯学の第一線がここにあるといっても過言ではありませんでした。本事業の議長である東京医科歯科大学口腔病理学分野の山口朗教授が開校式にて、この点について特に強調されていたことが印象に残っています。「大学院を修了し、若手の研究者としてキャリアを積んでいく中で、自分の能力と研究内容を異なる分野の専門家に評価してもらうことが必須である。今この場に集まった教授陣は、君達にとって最も身近で且つ最も重要な審査員であることは間違いない。まだ博士号を持たない段階で、このような先生方を前に発表できることは、限られた者しか体験することのできない貴重な経験である。この先端歯学スクールは必ず飛躍のための一歩となるはずである」。私は今まで物怖じしない性格であると自負しておりましたが、山口先生の言葉を聞き

ながら改めて錚々たる参加者を見回し、思わず身震いしたものです。

私が『先端歯学スクール』に参加すると決まったとき最も不安だったことは、厳しいと噂された質疑応答でした。今回の発表では研究の口演発表時間が10分に対して、質疑応答も10分設定されており、発表者と審査員が十分にディスカッションできるだけの時間が確保されていました。歯学会の重鎮達の鋭い質問に対して、正確な知識と緻密な論理を持って挑まなければなりません。実際、耳に入っていた評判通り、初めの発表者のプレゼンテーションが終わると、矢継ぎ早に質問が会場を飛び交いました。研究のコンセプトから細かなデータの解釈や文献的な知識まで、助言的な質問もある一方、辛辣な意見もあり、これぞ『先端歯学スクール』と感じたものです。(写真2)

ただその中でも、九州大学口腔細胞工学分野の平田雅人教授のお言葉が非常に示唆的でありました。平田先生がおっしゃったのは、研究における「横の広がり」の重要性です。「縦の広がり」が実験結果の連鎖による研究の結論だとすれば、「横の広がり」は1つの実験結果の検証性であると言えます。例えば、細胞にタンパク質 A の阻害剤を加えることで遺伝子 B の発現が減少するというデータが得られたときに、タンパク質 A を siRNA や dominant-negative でノックダウンしても同じ結果が得られるか。逆にタンパク質 A を over expression させたら遺伝子 B の発現は増強するのか、用いる細胞を替えても同じ結果が得られるのか。1つの実験結果の真偽を多面的から確かめることで、より緻密なデータの積み重ねができるようになり、研究手法の幅も増え、研究者として成長することができるということを、平田先生は「横の広がり」という表現で示されたのでした。

私は幸運にも最優秀賞を受賞することができました



写真2 発表前の緊張した面持ち

が、研究内容という点に関しては他の大学院生と大差無かったと思っています。むしろ、さすが選抜された大学院生達の研究発表だけあり、研究手法や実験データの組立て方などについて、自分がまだまだ未熟であると感じる点が多々ありました。発表前に自分自身で研究内容を客観視したときも、自省すべき部分があることはよく認識していたつもりです。ですから、『先端歯学スクール』のような多くの歯学研究者と優秀な卵達を前に発表することは、恐ろしさを抱えるものでもありました。

研究はなかなかうまくいきません。何日もかけて準備した実験は失敗し、再現性の得られないデータに一喜一憂します。そんな時、私はよく Journal of Cell Science 誌の Sticky Wicket という記事を読みます。この記事では世界のどこかの研究者達が Mole という匿名を名乗り、研究における様々な悩みや問題に関するコラムを載せています。『先端歯学スクール』前日の夜、私は或る Mole の書いた Presentations of the damned と題したコラムの中で、“Nobody is more interested in your work than you are.” という言葉に出逢いました。不安に駆られて錯乱状態だったのでしょうか。瞬間的に「誰もお前の研究に興味はない」と誤訳したせいで、非常に記憶に残った文章です。正しい意味は、「あなたよりもあなたの仕事に興味を持っている人はいない(自分の研究の面白さは自分が一番分かっている)」です。研究は科学的事象を明らかにする極めて客観的な営みですが、その一方で自分という主観的要素が大いに投影されるものでもあると思います。研究の前においては、自分自身の能力や個性も考え方も、研究を通して以外に伝達する術がありません。発表直前は会場の空気が自分を刺すように感じられましたが、私は“Nobody is more interested in your work than you are.” という言葉を反芻して発表に臨みました。発表後、大きな充実感と満足感を得て終わることができたのは、この神のお告げのような言葉があったからかもしれません。

『先端歯学スクール』に参加することで、私は3つのものを得ることができました。1つ目は「横のつながり」です。全国で自分の同期にあたる大学院生達が日夜研究に勤しんでいることを、発表を聞き、彼らと言葉を交わすことで感じました。非常に仲良くなった友人もできましたし、研究室での地道な日々も今では独りではないという実感があります。2つ目は「縦のつながり」です。発表後は盛大な懇親会があり、各大学の先生方とたくさんお話することができました。



写真3 受賞者と山口先生  
(右から二番目が筆者)

幾人かの先生にはお褒めの言葉を頂き、他の学会においても私のことを話題にしてくれたと聞いております。優れた実績を挙げた先生方に認めて頂ける喜びは格別です。研究の世界、歯科の世界で1つ自分の足掛かりを得ることができたのは大きな収穫でありました。前述した山口先生のお言葉そのままのものを経験できたと思います。そして3つ目は、“Nobody is more interested in your work than you are.”という言葉に集約されるかもしれません。自分のやってきたことが少なからず間違いでは無かったこと、なお一層この仕事に身を投じていこうという決心ができました。経験と自信を得て、一回り大きくなった自分を感じています。

2013年2月11～15日には、最優秀賞の副賞であるTravel Awardで、Toronto University Research Dayにて研究発表を行いました。またトロント大学歯学部生化学研究室のManolson教授のラボセミナーに参加させていただいたり、同大学歯周病学研究室のTenenbaum教授と研究に関するディスカッションをさせていただくなど、非常に貴重な経験をすることができました。このようなチャンスを、更なる飛躍へと繋げていきたいと思います。(写真3)

私の受賞は、到底私1人でどうにかなったものではありません。現在所属する口腔生化学研究室では、学

部生の時からゼミ生として多くの実験や研究発表をさせていただき、現在の自分の重要な礎を作っていただきました。「自分のために仕事をする」ことが、自分を中心とした周囲に還元されるということ。まだ道半ばですが、実証していきたいと思います。また学部生時には、歯科理工学研究室においても研究発表を行わせていただき、学生の中から対外的な活動に目を向けきっかけとなりました。大学院生となっても、1年次から歯系大学院生発表会にて発表をさせていただき、自分の研究を他分野の多くの先生から評価される貴重な経験を得ました。自分のプレゼンテーション能力を磨く良い場となり、直接的に今回の受賞に繋がった要因の1つであると考えています。その他、列挙していけばきりがありますが、鹿児島大学歯学部全体として、私の研究能力の向上へ多大なバックアップをしていただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。また2012年12月15日に行われた歯系大学院生発表会では、特別奨励賞を授与していただき、受賞を評価していただきました。さらに活躍することで、賞に報いるよう努力していきたいと思います。

もしこの文章を読んでくれている学生さんがいたら、1つ伝えたいことがあります。それは学生のうちに鹿児島大学でしか学べないことをたくさん学んで欲しいということです。僕の現在の姿は、学部生の時のゼミにおける研究活動や抄読会など、課外活動における貴重な経験が形づくっていることを強く感じています。CBT、OSCE、国家試験など越えるべきハードルが多い今だからこそ、それだけをこなしていると無個性化の一途をたどります。鹿児島大学で学んだという特異性を持つことが、将来の多様な場面で活躍する武器になるはずです。どうか積極的に自分から学びのチャンスを得て欲しいと思います。

最後に、このような文章を書く機会を与えてくださった歯科矯正学分野の宮脇教授、毎日暖かく見守りながらご指導して下さる口腔生化学分野の松口教授、スタッフの皆様にも心よりお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。